

マルコ福音書1章は、イエスを描くより先に洗礼者ヨハネの活動を描きます。洗礼者ヨハネは罪の告白をして生まれ変わることを訴え、水で洗礼を受けました。イエスもヨハネからヨルダン川で水による洗礼を受けました。本来的には、イエスが神の子であるならば、洗礼者ヨハネから洗礼を受けることはおかしいことです。罪の赦しのためにイエスがヨハネから洗礼を受けたという事は、イエスに洗礼を授けたヨハネの方が偉いのではないかと感じるからです。また、ヨハネの洗礼は罪を洗い清めて新しく生まれ変わることの象徴ですから、神の子イエスに洗い清めるべき罪があったということになります。ですから、マルコ福音書はイエスがヨハネから洗礼を受けたあとに、天の声が「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者である」と語ったという話を付加しているとみなす人もいます。このため、並行記事のマタイ福音書は3章14節ではヨハネが「わたしこそ、あなたから洗礼を受けるべきなのに、あなたが、わたしのところへ来られたのですか」と、洗礼を授けることを辞退したいように描いています。ヨハネ福音書にいたっては、洗礼者ヨハネにイエスを神の子と証言させますが、実際の洗礼については何も記していません。ヨハネによる洗礼を消し去って、イエスの神聖さだけを強調するようになっていきます。

洗礼者ヨハネが行った説教は当時の権力者へロデ・アンティパスを強く警戒させたようです。その説教には民心を扇動するような力があつたからです。ユダヤ人の歴史家ヨセフスによると、ヨハネの存在が権力者にとっては厄介なものだったし、へロデ・アンティパスは弟のフィリポスの妻との結婚に批判的であつたことから危険人物とみなされていたと証言しています。さらに、ヨハネは『ファリサイ派やサドカイ派の人々が大勢、洗礼を受けに来たのを見て、こういった。「蝮の子らよ、差し迫つた神の怒りを免れると、だれが教えたのか。悔い改めにふさわしい実を結べ」(マタイ3章7〜8節)と語つたと言われています。3章7〜12節の内容は洗礼者ヨハネが実際に語つた真正の言葉ですが、これらの発言が意味していることは、神が復讐をしに来るといふものです。神は斧で良い木を残して、悪い木を伐採し、穀物をふるいにかけてもみ殻を焼き捨てるということです。つまり、善か悪か、選択肢は2つしかないのです。決断の期間は短いから、早く決断をすべきである。今こそ、神は悪に虐げられている人々を救いに来る！ヨハネは悪人を成敗する神が到来することを宣べ伝えていたのです。

おそらくは、ヨハネは荒野に来る人々をヨルダン川で清めて罪を赦し、約束の地に送り返して、そこで神による正しい裁きと救いが来るのを待たせたのでした。そこにイエスが登場したのです。ヨハネの逮捕によつて、『時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい』と語つて、イエスは公の活動を開始するのですが、ここでは神の国が近づいたことを宣べ伝えます。神の国というのは、皇帝カエサルではなく、神が玉座に着いた世界のことです。ローマ皇帝カエサルではなく、神が公明正大に支配する世界のことです。イエスがヨハネから洗礼を受けたことは、他の人々が悔い改めるために洗礼を受けたのに対して、イエスの場合は逆に、この世の罪を担うために洗礼を受けたのです。あるいは、

人間の弱さや欠けを担うために洗礼を受けたのです。イエスは洗礼を受けることで、将来において十字架を担う道へと進んでいくのです。神の子イエスがなぜ悔い改めの洗礼を受けたのか？ それは担う必要のない十字架という重荷を担う存在として神に選ばれた自覚を持っていたからです。

私たち人間は生きていく中で自分でも信じられないような過ちを犯してしまう存在です。多くの場合、過ちを犯しているときは、その大きさに気づいていません。もし、過ちを罪と言いつらば、その罪はアダムとエバが禁断の木の実を食べたように、知らず知らずのうちに罪を犯し、しかも、その責任が自分にはないかのように言い逃れをしてしまふ。最も恐れなければならないことは、正しく、誠実であろうとすることが、逆に人を傷つけ、逃れようのない苦しみを負うことになることです。小説家の重松清さんが「十字架」という題名の小説で取り上げたのははじめの問題です。この物語は地方都市に住む藤井俊介（通称フジジュン）という中学2年生が自殺をしたところから始まります。フジジュンは2年3組の3人のクラスメイトからいじめを受けていますが、周囲のクラスメイトはそのいじめを黙認してしまうのです。その中に小学校時代は遊び仲間だった主人公の真田裕（ユウ）がいるのです。フジジュンは自宅の柿の木で縊死をするのですが、それをマスコミは「いけにえ自殺」と名づけます。それは公開された遺書に「僕はみなさんのいけにえになりました」と書いてあり、その遺書には4人の同級生の名前が書かれてあったからでした。

一人目は主人公のユウで、「真田裕様、親友になってくれてありがとう。裕ちゃんの幸せな生活を折っています」。二人目と三人目はいじめグループの主犯格の三島と根本で、「永遠にゆるさない。呪ってやる。地獄に落ちろ」と書かれてありました。四人目はフジジュンがひそかに恋心を抱いていた中川小百合で「迷惑をおかけして、ごめんなさい。誕生日おめでとございます」と書かれてありました。この四人は一方的にフジジュンの思いを背負わされたまま、その後の人生を歩むことになるのです。特にユウには幼馴染でありながらいじめを黙認したうしろめたさがあり、小百合には自殺直前にフジジュンの愛の告白を冷たくあしらったうしろめたさがあります。後悔しても取り返しのつかないことをした自覚が、女性新聞記者や月刊誌の記者との交流で深められ、その重荷と向き合って成長していく内容になっています。

この小説の中で女性新聞記者がユウに語る言葉が重要で、「ひとを責める言葉には二種類ある」と教えられるのです。それはナイフの言葉と十字架の言葉で、「ナイフの言葉は胸に突き刺さるよ。痛いよね、すごく。なかなか立ち直れなかったり、そのまま致命傷になることだってある。でも、ナイフで刺された時に一番痛いのは射された瞬間なの。十字架の言葉は違う。十字架の言葉は背負わなくちゃいけないの。それを背負ったままずっと歩くの。どんどん重たくなってきて、もう降ろすことなんてできなし、足を止めることもできない。…生きていく限りその十字架の言葉を背負い続けることになる」と言われるのです。ユウと小百合はフジジュンの両親から、生前に友人だったと誤解されて、毎年命日に自宅に招かれるようになるのですが、フジジュンとの本当に関係性を告白することができずに、十字架の言葉を背負ったまま成長していくのです。

イエスは自分の公生涯の初めに洗礼を受けました。それは、イエス個人としては受ける必要のないものです。しかし、イエスが洗礼を受けたとき天が裂けて聖霊が鳩のようにくだり、天から『あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者』という声が聞こえたのでした。私たちが受けた洗礼はキリストと共に古い自分に死んで、キリストと共に新しい自分に復活することです。洗礼によつて私たちはイエスと同じように聖霊を注がれ、「あなたはわたしの愛する子」と言われて、神の国に入れられたという宣言を聞いたのです。そして、イエスと同じようにこの世の重荷を背負う道を歩むことになったのです。その歩みは自らの十字架だけでなく、他人の十字架、自分でも気づかないままに他者を傷つけたナイフの言葉の罪も担っていくのです。「わたしの愛する子」という宣言は、私たちも洗礼の時に受けたものですが、それはイエスと同じように、十字架を担って生きていくスタートラインに立ったという宣言の言葉でもあるのです。

イエスが罪もないのに洗礼を受けたのは、この世の罪を担うためであったのです。私たちも洗礼を受けることで、この世のなにがしかの十字架を背負う道へと歩み出したのです。イエスと同じように背負わなくてもいい十字架を進んで背負っていく中で、実はイエスが招く神の国の姿の一端が見えて来るのです。「わたしの愛する子」という言葉の意味がそのときわかるのです。